

アリストテレスに於ける知性の構造（承前）

安 藤 孝 行

八

一方この實踐的思維の特殊の極に於て個別的直觀知としての理性と言ふ概念を見出すことは特に注目し得ること
 言はねばならない。倫理的徳と思慮の關係は後段に改めて考察することとして、我々は先づこの實踐理性πρακτικήと言ふ概
 念の吟味に向はう。今迄のところ理性と言ふ概念には廣狹二つの意味が認められた。一は理知一般を現す類概念であ
 り、それは隨つて理論的なものと實踐的なものとに分けられる筈であるが、他の一つは特に理論知の中でも普遍的原
 理の直觀を事とする機能であつて、先に列擧した五つの理知的徳の一を占めたのはこの狹義の理性であつた。しかる
 に今や我々は實踐知の一種として、思慮の契機をなす如くみえる實踐的な理知と言ふ概念に遭遇する。それは實踐知
 の一種にすぎないから當然一般的な意味に用ひられた實踐理性とは區別されねばならない。之こそは先に考察した能
 動理性の問題と共に、アリストテレス哲學に於ける難問の双壁と言ふも過言ではない。恰も能動理性と言ふ思想が
 アリストテレスの全著作の中僅かに心理學の一箇所にのみ現れ、しかも嚴密には能動理性 *νοῦς theoreticus* と言ふ
 様な成語として述べられてゐたのではないのと同様に、實踐理性と言ふ思想も亦僅かにニコマコス倫理學の一箇所に
 のみ現れて、必ずしも實踐理性 *νοῦς prakticus* と言ふ成語をなしてゐる譯ではないのである。隨て能動理性につ
 いての難問も第一に果してアリストテレスがその様な特殊の理性を認めてゐたのか否かにかゝつてゐた如く、茲でも
 先づ第一に問題となるのは、實踐理性と言ふ如き特殊概念が果してアリストテレス自身の眞意に副ふものか否かと

言ふ點にある。その問題の敘述とは次の如き一節である。^(一五二)

「理性も兩様の方向に於て最終的なものに關つてゐる。詳しく言へば、諸の最初の命題並びに最終的なそれに關するのは理性であつて證明ではない。即ち理性は論證の場合にあつては諸の不變的な最初の命題に關るし、實踐的なそれにあつては最終的にして（他様で）ありうるものに關り、前者の場合とは別の方向に位するところの前提に關る。この認識は誠に目的の端初をなす。何故ならば個別的なものからして一般的なものを生ずるのだからである。それ故我々は之等に對する感覺を持つて居らねばならぬ。この感覺が即ち理性である。」

茲に述べられてゐる理性と言ふ概念については略三通の解釋がある。第一には論證に於ける理性とは理論認識に於ける普遍的原理の直觀知を現し、實踐的なものに於ける理性とは實踐的推論の小前提に關る直觀知であると區別するものであつて、リッター^(一五三)、トレンデレンブルク^(一五四)の解釋が之に屬する。第二の解釋は、論證と言ふ語を實踐推論の意味

にとり、この箇所に現れた理性を總じて實踐理性となすものであり、隨て右の敘述は實踐理性に於ける二契機として

^(一五五)

普遍と特殊の兩極の直觀知を認めんとするものでタイヒミユラーの說がそれである。第三には之と全く反對に論證に

^(一五六)

於ては言ふ迄もなく、實踐的認識に於ても、理性とは單に理論知の一種として直觀知を意味するものであり、問題の敘述の中には何等特殊な實踐理性といふ如き概念は認められないと言ふ說であつて、グルターが之を代表する。我々は「論證」と「實踐的なもの」との解釋に關する限り第一の說の正當性を信する。茲に論證と言ふのは理論的認識に

於ける推論の一形式即ち必然的原理からする推論の意味であつて、理性がその根本前提に關るといふのは先に理論知の一種として知識と共に叡知の一契機を形成した理性に他ならない。今之に對立して實踐的なものに於ては個別の極に關るとされる理性はもとよりその言葉の示す如く實踐知の一種たるべきであつて理論知である筈もなければ、また實踐知一般を意味する程廣い概念ではなく、確かに直觀的な實踐知と云ふ特殊機能と認める他はない。併し均しく理性と呼ばれる認識機能が理論的領域と實踐的領域とでは反對の極に關ると言ふのは何故であらうか。而も實踐に於て

も普遍的認識はない譯ではない。實踐領域に於ても理性を認め乍ら、それをば普遍的原理的認識能力とせずして、特に個別的事態の認識に限定するのは不自然ではないか。ハルテンシュタインが之を異とするのも尤もなことと言はねばならぬ。^(一五七)

上掲の三説の中、タイヒミュラーの解釋はこの難點をまぬがれてゐる。彼は上述の論證とは實踐推論のことであり、茲に述べられてゐる理性とは専ら實踐理性の意味に解すべく、理論理性とは無關係であると主張する。^(一五八)そして論證を實踐推論の意味に用ひることは他に例がない譯ではなく、例へばニコモス倫理學第七卷第四章に於て情慾^{パトス}に捉へられた者が論證したり、エムペドクレスの言葉を口誦さんだりしても實踐知を行使してゐることにはならぬと言つてゐる際^(一五九)の論證は理論知ではなくして實踐知であり、實踐推論のことであると解される。斯くしてタイヒミュラーによればアリストテレスは實踐理性をば實踐推論の最高大前提と最低小前提の兩原理の知的直觀能力となしたことになる。この解釋は前掲命題が主として實踐知の構造を論ずるところの關聯に於て語られてゐることによつて裏書され、かなりの蓋然性を持つことは否定出來ない。併し乍ら右の論據に於てもエムペドクレスの言葉を誦することと、論證することは必ずしも同一の事を意味すると解する必要はなく、論證とは例へば幾何學の論證であつても差支ない。情慾に支配された人と雖も理論的認識には一應支障を來さないと考へられるからである。^(一六〇)且論證と言ふからは普遍と特殊の媒介である。それでは先の命題に還つて、理性が論證に於ては最高普遍に關り、實踐に於ては最低特殊に關ると言ふことがどうして言はれやうか。勿論タイヒミュラーは實踐とは直接的行動であると限定するのであるが、茲に述べられてゐる理性も論證も兩つ乍ら實踐的なものであると解する以上、理性が論證に於て最高普遍に關ると言ふことは、實踐推論が最高普遍的原理のみによつて成立するとしても言ふ以外に殆ど意味を持ちえないことにならう。勿論理論的推論と雖も普遍と特殊の兩契機を含む點には變りはない。それ故理性が論證に於ては普遍に關ると言ふ命題は嚴密に解すれば意味を持ちえない。唯之を論證をれ自身を目的とする理論認識と解する場合にのみアリス

トテレースの言葉が意味を持ちうるのである。論證と言ふ概念は確かに時として実践的な推論の意味にも用ひられてゐる様であるが、^(一六)嚴密には推論と同意味ではなく、唯必然的な前提を持つた推論に限られ、随て他様たりうる事柄に就ては論證はありえないと言ふことはアリストテレスが極めて明白に規定してゐる所である。^(一七)單に理論理性との均衡を保つ爲ならば、實踐理性にも唯普遍的原理認識のみを許すべきであつて、個別に關する感覺を理性であると言ふべきではない。理論理性はこの様な個別的認識には關らないからである。實踐理性に普遍と特殊の兩極の直觀を認めるよりは、單に實踐理性を個別にのみ關らしめる方が理論理性が普遍の一極に關るのに對して一層均衡的である。我々は寧ろ實踐知の普遍的原理が理性と言ふ様な直觀知によつて把握されない特殊の理由を求めた方が有效ではなからうか。

一五二 Eih. Nich. z. 12. 1143 a 35.

一五三 Ritter, Geschichte der Philosophie III. 1831.

一五四 Trendelenburg, Historische Beiträge zur Philosophie. III. 1867. Brandis, Handbuch der Geschichte der griechisch-romischen Philosophie. II. 2. ü. (Zeller, Philosophie der Griechen. II. 2. も始めは之に隨つたが後ハヌターの説で改められてゐた)。

一五五 Teichmüller, Neue Studien zur Geschichte der Begriffe. III.

一五六 Julius Walter, Die Lehre von der praktischen Vernunft in der griechischen Philosophie 1874.

一五七 Hartenstein, Ueber den wissenschaftliche Werth der Ethik des Aristoteles. (以下本書に關する敘述はすべてハヌターからの孫引である)。

一五八 Teichmüller, Op. Cit. 210.

一五九 Eih. Nich. H. 4. 1147 a 16. Z. 5; 1140 b 14.

アリストテレースに於ける知性の構造(承前)

一七〇 Ibid. Z. 5. 1140 b 11.

一六一 Ibid. Z. 12. 1143 b 11. 「かくて經驗ある年とつた人々や思慮ある人々の論證されざる主張や意見に對しても、論證に對してと劣らず注意せねばならぬ。」Part. An. A. 1. 690 a 1. 「論證や必然性の様式は自然學に於けると理論學に於けるとでは別である。」もつとも之だけでは論證は自然學と理論學に關るので實踐知には關らぬ様であるが、その後述べられてゐる自然學的論證はまさか思慮の實例として用ひられる健康實現のための醫學的推論に他ならない。

一七二 An. Post. A. 2. 71 b 18. 「私が論證といふのは知識的推論のことである。そして知識的といふのはそれを持つことがそれ自ら知識することである如きところのものを言ふ。」Eth. Nich. Z. 3. 1139 b 31. 「それでは知識とは論證の把持性のことである。」Ibid. 5. 1140 a 38. 「従つて知識は論證を伴ふのであるが、その原理が他様にありえないものについては論證はありえなからぬ。」Ibid. 6. 1141 a 1. Met. A. 5. 1015 b 7. Z. 15. 1039 b 31. Z. 5. 1140 a 34. An. Post. A. 4. 73 a 24. A. 8. 75 b 24.

九

實踐理性と言ふ概念を専ら類的な意味に限つて、實踐的直觀知としての實踐理性を否定せんとするブルターの説に至つては、^(六三)その論據は實踐知の機能をば専ら目的實現の爲の手段を發見する因果性の探究に限らうとするところから由來するものであつて、詳しくは思慮の構造論に關聯して批判されるべきものであるが、差當り右に引用した問題の一節の解釋としては最も不十分な説と言はねばならない。抑この言のなされてゐる聯關そのものが實踐知が個別に關ると言ふことを述べる場合なのであるから、そこに純粹理論的認識を持ち出して、しかもその一部が個別に關る直觀知であると主張するのは全く唐突の感をまぬがれない。ましてや理論知の一種としての原理直觀を事とする理性に對照して殊更に實踐的なものが云々されるに於ては之を理論知とみることの不自然さは倍加されやう。またこの理性の個別的直觀知は目的のはじめ又は目的の原理であると言はれることを如何に解すべきであらうか。ブルターは論證を直

ちに理論的となし、「實踐的なもの」と云ふ言葉を直ちに實踐理性と解すべき理由は何等述べられてゐないと言ふ。彼の考によれば等しく個別に關ると認識であつても明察は單なる判別であるのに、思慮は命令的であることによつて實踐的であるが、茲で個別に關ると言はれる理性については別段實踐的であると言はれてゐないと言ふ。(一六四)併しアリストテレスは個別に關る理性を實踐的と呼んでゐるのではなく、逆に理性が實踐的なものに於ては個別に關ると言つてゐるのであるから、その理性の實踐性はブルターの議論によつては斥けえないのである。理性の對象の個別性から實踐性が引出されるのではなく、實踐的に働く理性の對象が個別に限定されたのであるから、個別知の凡てが實踐的でないからと言つて茲に述べられた理性に實踐性を拒む權利はない筈である。またブルターは推論に理論的推論と實踐的推論とがあることを認め乍ら、その契機としての理性に全く實踐性を拒否してゐる。即ち普遍知を凡て理論的と解するのであるから推論の大前提は共に理論的なることは言ふ迄もないが、それでは小前提は實踐推論では實踐的であるかと言ふに、さうではなく唯個別に關する知覚判断であると言ふ點で理論推論と異なるにすぎないとみるのである。(一六五)實踐推論は個別者の規定に迄及ぶ點で理論推論が一般者の圈内に終止するのと區別されることになり、結局兩者の相違は普遍と個別といふ相對的相違にすぎないことになる。しかもブルターが實踐推論の小前提を理性の機能に歸し乍ら、その實踐性を拒否する論據は唯それが直觀的であつて勤考的でないと言ふに止まる。(一六六)しからば何故ブルターは理性が實踐的たる爲には勤考的であらねばならぬと言ふのであらうか。何故直觀は實踐的でありえないのであらうか。殊に實踐が個別に關り、推論の結論が行爲の始であるなら、小前提はまさに實踐的たるべき筈ではないか。之は勿謂ブルターが知識を知識的と勤考的又は思想的とに分けるアリストテレスの分類に捉へられてゐる爲であらう。併し若し實踐知が勤考的と言はれる故に勤考以外のことをなしえないと言ふなら、同じ理由によつて、理論知即ち知識的理知は唯知識以外の働をなしえない筈である。そして勝義の知識エピステメは前述の如く推論知であつて、原理の直觀ではありえないのである。我々は理論知が知識的と言はれるからとて之が理性の原理直觀をその契機として含みえない

いと言ふべきでないと同様、實踐知が勘考的と呼ばれるからとて、實踐理性の個別直観を實踐知から排除すべきではない。知識にしても勘考にしても、それが推論知であるからには原理の直観を豫想せねばならぬ。この様な直観は理論知にも實踐知にも存する筈であつて、何れか一方に歸すべきでもなければ、何らか理論の外に求むべき必要もな
 50。

ブルターは理性を凡て理論知であると解し、之に普遍と個別の兩極の原理認識を歸する。そこで理性は普遍的原理のみならず、個別的事態の直観であり、就中後者は普通の意味での知覚であると考へる。^(一六七)しかし知覚判断の對象は他様たりうるものであるのに、^(一六八)理論理性は如何にして之に關りうるのか。理性が他様たりうるものに關ると言ふことは理性を一義的に解する限り思慮は他様たりうるものに關り、^(一六九)理性は他様たりえざるものに關ると言ふアリストテレスの命題と眞向から矛盾するものと言はねばなるまい。之に對するブルターの解答は愈々奇怪である。^(一七〇)即ち彼によればエンデコモノンに關りうる理知活動は唯勘考を置いて他はなく、しかも理性は勘考ではないのだから、エンデコモノンに關る理性の活動は理知的活動ではなくして文字通りの知覚活動である。知覚と理性は一應は對立するが、而も無關係ではなく、發展の關係に立つ。知覚は理性に發展するものとして既にそれ自體理性であると言はれるのであつて、この様に廣義に解された理性の第一機能が普遍的理知的認識であるなら、その第二機能がエンデコモノンに關る知覚である。思慮がエンデコモノンに關り、^(一七一)理性はメー・エンデコモノンに關ると言ふのは理性の第一機能についての命題であつて、之はその第二機能としての知覚がエンデコモノンに關ることを妨げない。個別の知覚は凡ゆる認識の條件であるが故に之を理性と言ふ。思慮も理性もエンデコモノンに關る點では同様であつて、唯前者は未來的存在に關り、後者は現在の個物に關ることによつて區別されるにすぎない。のみならず思慮はその中に理性を含む。理性は寂知の契機でもあれば思慮の契機でもある。しかも理性は確かに一種の理論知の徳であるから、思慮は自己の中に理論知の徳を含み乍ら、それ自ら獨立の理知的徳である譯である。

要するにブルターの解釋によれば理性も感覺も認識の基體的質料的要素として、全ての認識活動に汎通的となり、感性的なるものと知的なるものとの對立が廢棄されると共に、理論知と實踐知の明確な分別も完全に否定されて了ふ。之はもはやアリストテレスの解釋ではなくして一つの創作と言ふ他はない。我々は唯この様に理論理性即ち感覺を自己の契機として含む思慮は如何にして實踐知となりうるかと言ふ一つの難問を追及するに止めよう。ブルターによれば理性は常に理論的認識を事とし、之が普遍と個別の兩極を直観するのであるから、理知的活動にとつて殘されたのは普遍と個別を媒介する推論知のみである。所謂知識と言ふのは普遍と特殊を媒介する理論的推論知であるが勘考とか思量と言はれるものは一般には實踐的推論知として認められてゐる。しかしブルターの如く推論の兩極を單なる理論知に限る者にとつては特に推論的段階に於てのみ實踐的な理知を認める道がない。そこで彼が辛うじて發見した道は實踐的推論に於ては推論過程そのものに實踐性があるのではなく、推論過程は全く理論的な知識から借り來つて、唯最後の結論に於て命令的となると解する。^(一七三)しかしこの結論に於て突如として出現する命令は一體如何なる根源に由來するか。それはもはや如何なる意味でも理知的な機能ではなく、單に直接的な欲求と言ふ他はない。實踐理性と言ふものも實踐的理知と言ふものも本來的にはあることなく、^(一七四)理性や理知そのものは理論的であつて、僅かば之が偶欲求と結合する爲にのみ附帶的に實踐的たるにすぎない。斯くしてブルターの創作的解釋はアリストテレスに實踐的領域に於ける理知的活動の一切を非本來的偶然的なものに貶し了つたのである。問題の個別に關する直観知としての理性を理論的と解すべからざることは之によつて明かであらう。しからば實踐理性がなす個別的直観とは如何なるものか。我々は再び前掲の本文に立還つて考察を續行しよう。

一七三 Walter, Op. Cit. 5-81.

一七四 a. a. o. 43.

アリストテレスに於ける知性の構造(承前)

一六五 a. n. o. 230, 242.

一六六 a. n. o. 32f. 46, 60f. 322.

一六七 a. n. o. 314f. 335.

一六八 因みに前掲ニコマコス倫理學第六卷第十二章の一文に於て「理性が實踐的なものに於ては他の前提即ち最終者」*ἐντέλευταίον*に關ると言ふ場合、この最終なる *ἐντέλευταίον* を如何に解すべきかについて疑問がある。アルターは他の前提即ち小前提と *ἐντέλευταίον* とを同一視してゐるが、ツエラーは之に反對して (Op. Cit. II. 2. 650, N. B. 2) 後者は結論に當ると言ふ。例へば凡ゆる甘きものは味ふべし、この物は甘くあると言ふ第二前提は未だ直接行爲に導くに足らず、行爲に導くはこの物は味ふべきであるとの結論であると言ふ。そして第六卷第八章第九章等に於て *ἐντέλευταίον* が最終者として示されてゐるのを引證する。之はツエラーが *ἐντέλευταίον* と言ふ語を可能な存在、未來的存在と解した爲である。そしてこの様な解釋はアルターにも認められる。(Op. Cit. 332) 之は例へば Edh. Nich. Z. 2. 1139 b 7. 「我々は既に生じたものについてではなく、將來的で可能なもの (*ἐντέλευταίον*) について思慮する。しかるに既に生じたことは生じないこととありえないこと (Notu. An. 7. 701 a 23. 「作爲的推論の前提は二つの種から生ずる、即ち善きものからと可能なるもの (*ἀγαθόν*) からとである」と言ふ言葉と對應して一應尤もな解釋である。そして *ἐντέλευταίον* といふ概念では獨立に用ひられれば論理的觀念的な可能性即ち possibility を現すものにちがひなく。しかし問題の箇所 (1143 b 3) に於ては *ἐντέλευταίον* π xai ἀνάγκη *ἐξεν* と云ふ語を補ひて「他様でもありうるもの」と解すべきであらう。(Russau, Forsch. 77. Stewart, Note ad loc.) たとひ原文の補足を行はずとも少くも意味的には之を含蓄してゐると思はれる。前記 1139 b 9 の「既に生じたものは生じないこととありえないこと *οὐκ ἐντέλευταίον xai μή γενέσθαι*」と言ふ言葉も實は他様ではありえないことを意味して居り、隨て之に對する未來的存在が「他様でもありうる」ことを含んでゐるのである。若しこれをアルターやツエラーの如く解するとすれば、他方理論理性が *ἐντέλευταίον* に關るといふことは、不可能存在即ち矛盾概念或は過去の存在に關るといふことにならざるをえまいが、之は不合理である。

一六九 Edh. Nich. Z. 6. 1141 a 4.

ルクの解釋によれば、目的の對象が實踐理性を動かす原理であり、凡ゆる目的は活動、行爲に向ふが、行爲は個別的である故實現さるべき個別的目的が不動なるものとして思惟を動かしその限りに於て個別的なものが實踐理性の原理であると言ふのである。ブルターは之を酷評して完全な誤解の塊にすぎないと言つてゐるが果してさうであらうか。ブルターの説そのものを知つた我々にとつては彼の批評も輕々しく信ずることは出来ない。全き誤解は彼我何れに歸せられるべきか甚だ疑はしい所だからである。兎も角トレンデレンブルクのこの解釋の特異性は二つの點にある。一つは *essentia rationis operantis* を目的に就て勸考すると解したことであり、今一つは *essentia* を終局的なもの即ち個別的な事態と解したことである。ハルテンシュタインの反對論もこの二點に向けられる(一七七) 即ち *essentia* とは「目的に就て」ではなく *ratio operantis* とは限定することではない。隨て茲に述べられた實踐理性機能は目的の限定にあるのではなく、却て手段の探索を意味するものにすぎない。トレンデレンブルクは、實踐理性の本質が目的の限定である」と言ひ乍らしかも、「目的の對象が實踐理性を動かす原理である」と言ふが、ハルテンシュタインによれば第一の命題はアリストテレスの語つてゐる事でもなければ、第二の命題とも一致しない。第一命題では理性が目的を限定するが第二命題では理性が目的に限定される。前者に於ては目的の限定が理性に依存するの故、後者に於ては理性の働は既に決つてゐる目的に依存することになると言ふのである。併し之はトレンデレンブルクの眞意を解せざる批評である。トレンデレンブルクの第一命題は理性が目的表象を限定すると言ふことであり、第二命題は客観的な目的對象が理性に對して目的因として作用すると言ふことであつてそこには何等矛盾は認められない(一七八) 理性が目的表象を限定するのは、目的對象が理性を動かす限りに於てある。理性の原因性は動力因的であり、目的對象の原因性は目的因的である。そして動力因の原因性の中には目的因の原因性が含まれてゐるのである。ブルターはトレンデレンブルクが目的ではなくして目的對象を理性の原因としてゐる事實には氣づいてゐる。それにも拘らず彼はその區別の意味を理解せず目的の對象が動かすと言ふのは矛盾を外観上避けうるに止まると批評してゐる(一七九) 之は我々をして言は

しむれば却て目的因と動力因の區別や目的表象と目的對象の區別に對する彼の無理解を曝露するものに過ぎないのである。

唯トレンデンブルクが倫理學第六卷第十二章に言ふ特殊な直觀的實踐理性を心理學第三卷第十章の「目的に就て勸考する」實踐理性と同一視したのは、確かにブルターの言ふ如く不當な混同である。心理學に於ける實踐理性は類的な實踐理性であつて、思慮の一契機としての特殊な實踐理性ではない。ブルターは心理學に於ける類的實踐理性の本質を目的實現の爲の手段の思量とみるのであるから、その思惟の始をなすものは直接與へられた欲求であり、思惟の終局即ち思量の終點が行爲の直接着手點であると言ふことになる。即ち *svaka to' loya' oshos* は手段認識の謂であり *ov' y' oshes* が實踐理性の *uoyz* であるとは、欲求が手段の探究の動機をなすことであり *to' sayarou* とは思量の終點であつて、之が行動の始であると言ふことになる。トレンデンブルクが *to' sayarou* を倫理學に現れた *ta' sayarou* の一種たる個別的なるもの、即ち行動の事態とみるのは誤解であると言ふのである。要するに之は實踐理性の機能を單なる手段の探究に限るか、目的に關する實踐理性と言ふものを認めるかと言ふ根本的な見解の相違に基くもので、詳しくは前にも斷つた如く思量についての研究にまたねばならない。併し最終者と言ふ言葉が實踐理性の最終項を意味すると言ふことは大きな蓋然性を含んだ解釋には違ひないが、假令この説をとつてこの點に關する限りトレンデンブルクの解釋を斥けるにしても、それは必ずしも倫理學に於ける最終者に關する認識が目的の原理であることをさまたげるものとは思はれない。類的な意味での實踐理性の最終項は個別的な事例であつて、之は行爲の第一着手であると共に具體化された目的であり、その目的の限定には確かに理性が參與して居る。そして倫理學に於ける特殊な實踐理性は心理學に於ける類的實踐理性の一つの契機をなすものと考へるのである。類的實踐理性が媒介知であることはブルターも認めるところであるが、それならば當然それは多くの契機を含み、その中には當然個別に關する直觀知も亦認められるべき筈である。それは恰も廣義の理論理性が知識を含むと共に直觀知としての狹義の

理性も亦等しくその一契機をなすのと同様である。且心理学に於ける實踐性と言ふものが、目的限定の機能を營むことは我々が先に移動の原理を論ずる際に認めたと同様であつて、彼處に擧げられた如き諸論據よりして我々はそれが單なる手段認識に限られると言ふ説には到底承服することをえんない。更にまたブルターは *of the nature* が實踐理性の始であると言ふ言葉を單に欲求が理性を限定すると言ふ様に解してゐるが、之はアリストテレスの眞意に副ふものではない。*of the nature* とは欲求の關するところのもの、即ち欲求の對象であり、客觀的な目的であつて、意識に内在化せられた目的表象とか欲求と言ふものではない。目的對象が實踐理性の原理となるとは目的對象が理性を通して欲求能力に作用して、そこに理性を媒介とせる欲求表象が成立すると言ふことでなければならぬ。アリストテレスは明かに欲求の中に理性の媒介あるものと、然らざるものとを區別して居るし、欲求對象と理性對象を同一視すると共に、合理的な目的意識は對象の價值認識を媒介とするのであつて、その逆でないことを注意してゐるのである。もとより實踐理性の中には欲求を前提して手段を探究する如き機能もあるが、單にそれに盡きるものではなく、目的そのものを限定する如き實踐知も亦認められて居るのであり、狹義の實踐理性もかくの如き意味を帯びるものと解すべきであらう。

ブルターは實踐理性を徹頭徹尾手段の認識と限定するので、目的の定立限定は全く直接的な欲求に歸せられる。目的は欲求によつて立てられ、實踐理性は何等之を變化させることなく、専ら目的實現に影響しうるのみである。即ち實踐理性は欲求と一緒になつて之を根源的な欲求對象に對する理性的に限定された反應とすると言ふのである。併しさればと言つて欲求に合理的なものを全然認めないのではなく、「實踐理性がこの事をなしうるのは欲求を限定する理性的表象の力にまつのであつて、理性概念としての目的、即ち普遍的目的がこの表象に屬する。その普遍的目的、例へば人間は中庸を守るべしと言ふ如き大前提は實踐理性が作るのではなく、他から借り來るのである。一般的目的は與へられたものであり、それは唯凡ての普遍的なもの如く知識の對象であり、その原理は理性によつて捉へられ

るものである。實踐理性は唯思量的であり、手段を教へるにすぎない」と言つてゐる。^(一八二)併しこの議論は甚だ混亂したものであつて殆どその眞意を解することが出來ない。一體實踐理性の機能が單に手段の探究にある時、その實踐理性の手段限定が「欲求を限定する理性的表象の力にまつ」とは何の事であらうか。欲求が端的に與へられると言つた直ぐ後で「欲求を限定する理性的表象」を語る事が如何にして可能であらうか。また理性概念としての目的即ち普遍目的がこの表象に屬すると言ふことも、目的が本來欲求の對象に止まると言ふ以上理解に苦しむ言辭である。しかもそれに次で人間が中庸を守るべきであると云ふ様な判断が實踐理性の所産ではなく、理論的認識として外から借り來るものであると言ふ。この思慮の根本命題が實踐知に屬さぬと言ふ暴論に至つては、タイヒミュラーならずと雖もその無理解の程に驚かさざるを得ない。要するに之はブルターがアリストテレスの實踐知に於ける目的限定的なものと手段探索的なものの両面性をば強引に後者の一面に限らうとした爲に生じた不條理と思はれる。^(未完)

- 一四五 Trendelenburg, Op. Cit. II. 378. Cf. Walter, Op. Cit. 44.
- 一四六 De An. I. 10. 433 a 14.
- 一四七 Hartenstein Op. Cit. (Walter 45.)
- 一四八 Cf. Loening, Die Zurechnungssche des Aristoteles. 30.
- 一四九 Walter, Op. Cit. 52.
- 一八〇 「アリストテレスに於ける靈魂諸部分の聯關」第九節。
- 一八一 Walter, Op. Cit. 207 ff.
- 一八二 a. a. o. 53. Cf. 208 ff. 215 ff. 230.